

建築家明石信道の作品にみる「地縁的建築」の考察

- 新宿駅周辺の4つの作品分析を通して -

正会員 ○ 永田奏*
正会員 本橋仁**
正会員 中谷礼仁***

日本近代 明石信道 新宿

1-1. 研究目的

明石信道¹(1901-1986以下、明石)は、早稲田大学建築学科教授をつとめ建築家として新宿や函館に作品を残した建築家である。明石は新宿駅周辺に彼の処女作である新宿武蔵野館を始めとし、生涯に4つの建築作品を残した。

《新宿武蔵野館》(1928)/《新宿帝国館》(1931)

《新宿区役所庁舎》(1966)/《安与ビル》(1968)

こうした同地域における明石の継続した設計活動について、建築史家の長谷川堯²は「地縁的建築」³と名付けている。本研究は、その新宿における4つの作品の人的関係性に着眼した。ある特定の地域における建築家と施主との関係性について分析することで、明石の建築設計活動の特徴を考察する。

1-2. 研究方法

上記の目的を達成するために、明石自身が残した雑誌連載や論説のみならず明石ゆかりの人物にヒアリングを行った。また、早稲田大学建築学科教室本庄アーカイブズ所蔵の「明石信道古希記念祝賀パーティー」の録音データ等の新出の第1次資料も利用した。なお、ヒアリングは2015年9月に明石信道研究室卒業の建築家相田武文、明石の次男である明石乗二と明石の旧帝国ホテルの実測資料をまとめ展覧会を行った阿部幸正、安与ビル施主安田善一の息子安田眞一の四人を対象に行った。

1-3. 既往研究

新宿駅と近傍の土地利用変遷については、1930年代から1970年代を扱った石樽督和『闇市の形成と土地所有からみる新宿東口駅前街区の戦後復興過程：新宿駅近傍における都市組織の動態をめぐって』⁴に詳しい。

2. 新宿に設計された4作品概要

2-1. 新宿武蔵野館

竣工年:1928 用途:映画館

映画館・新宿武蔵野館の二代目の建物で、1928年12月14日竣工。1155名を収容することができた。敷地面積333.333坪、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造である。建築工事請負は森田
工務所。1964年に取り壊され、現在は同場所に《武蔵野ビル》が建っている。



図1 新宿武蔵野館

2-2. 新宿帝国館

竣工年:1931 用途:映画館

新興キネマという映画製作会社の封切館として設計された。その後吉本興業の手に渡り、吉本芸人の実演場として使用するために改装されている。構造は木造とされている。新宿帝国館の敷地を含めた新宿東口の地区は1944年に建物疎開で交通疎開空地に指定されたため、新宿帝国館は同年に取り壊された。



図2 新宿帝国館

2-3. 新宿区役所庁舎

竣工年:1966 用途:区役所

新宿区役所庁舎の二代目の建物で、1966年竣工、鉄骨鉄筋コンクリート造。敷地面積は2252㎡、高さは30.85m。2014年から2015年の耐震工事を経て現在も使われている。新宿区から早稲田大学へ設計者の選定の相談があり構造設計を内藤多仲研究室が行うことが決定した。その後内藤の推薦により明石が意匠設計を担当することとなった。

図3 新宿区役所庁舎
構造設計を内藤多仲研究室が行うことが決定した。その後内藤の推薦により明石が意匠設計を担当することとなった。

2-4. 安与ビル

竣工年:1968 用途:商業ビル

安与商事株式会社所有の商業ビルで、6、7階に安与商事の運営する懐石料理「柿傳」、1階に銀行などが入っている。鉄骨鉄筋コンクリート造、高さは32.27m。構造を内藤多仲研究室、建築施工を鹿島建設、柿傳の内装を谷口吉郎が手掛けた。



図4 安与ビル



図5 4つの建築の所在地

3. 施主と建築家

関係者へのヒアリングを行ない、《新宿武蔵野館》と《安与ビル》に関して新出事項が明らかになった。

3-1. 新宿武蔵野館

同建築は明石が学生時代に手がけた処女作である。学生であった明石に設計の依頼があった経緯について、これまで文献等では不明瞭であった。紀伊國屋書店の創業者であった田辺茂一(1905-1981)の回想には、武蔵野館の支配人角間啓二と明石が「懇意の間柄」⁵であったという述懐がある。これについて今回ヒアリングにより、明石が学生時代、卒業設計の時期に通っていたという映画ポスターを扱う店の店主が、武蔵野館支配人・角間啓二の兄であったことが明らかとなった。角間は、もともと新宿の商店街に店舗を構えていて、新宿で初めての映画館を作ろうと企画した初期メンバーの一人でもあった。明石が設計した《新宿武蔵野館》の前身である、一代目の建物が老朽化し手狭になっていたため建て替えをする時期に、偶然にも学生であった明石へ設計の依頼が舞い込むこととなった。明石は、学生ながら設計に携わることに対し、当時角間氏より『失敗しても独りでやりなさい』とSRCの映画館の依頼を受けた⁶と後に述懐している。

その後、角間らが企画した新宿で初めての映画館・武蔵野館は新宿に映画館ブームをもたらすこととなる。そして最新式の上映機能を備えた二代目はその人気を不動のものにした上に新宿の映画館文化の土台を作り上げ、街の象徴的存在となった。

3-2. 安与ビル

同建物は安与商事株式会社の初代・安田善一が、父である安田与一の業績を新宿に残すために建てられた記念碑的意味を併せ持つ商業ビルである。現在でも新宿駅東口に近接して、その特徴的な形態で広く知られている。また安与ビルは「新宿で大人の道草を」⁷というコンセプトを持って建設され、現在でも茶会や講演会が開かれ、茶器専門のギャラリーが運営されるなど地域に向けた文化発信を続けている。



図6 雑誌の安与ビル特集

安田与一は新宿東口エリアにて料亭や旅館を経営し、伊勢丹を新宿へ進出させた新宿における大実業家であった。安与ビルの施主であった安田善一も父から受け継いだ旅館などを経営し、新宿へ通う多くの文化人たちの社交の場を提供した。

今回ヒアリングによって、安与ビルの設計の依頼は善一の兄弟である安田与佐を通してであることが明らかになった。安田与佐は早稲田大学建築学科、明石信道研究室にも所属した、明石の教え子であった。明石研究室を卒業後、建築家として活動、安与ビルにおいても地下階の設計などに関わっている。

4. 地縁的建築に関する考察

以上のように明石が新宿駅周辺で手がけた4つの作品は、いずれも個人的な、地域的な関係「地縁」によって設計依頼がもたらされたことが判明した。

特に武蔵野館は新宿の映画館、ひいては新宿そのものを代表する建築となり、安与ビルは新宿に通う文化人を集める場所となったと言える。また新宿区役所は新宿区政の中心の場であり耐震工事を経て今後も使い続けられる。

とくに指摘すべき重要な点は、こうした明石の施主は、いずれも新宿文化の担い手としてその発展において非常に重要な働きをしてきたと言える点にある。その結果として、明石がこれらの施主からの依頼を受けて設計に携わった建築作品はいずれも新宿において新しい文化の発信拠点となる作品となる運命をもった。

明石は後年自身の連載『映画館設計ノート(17)』⁸の中で、一つの建築に携わる者同士が互いを信頼し合い情を持って関わることで名建築が生まれると述べていた。これまで述べてきたような施主と建築家の関係が、新宿という場所で生涯にかけて関係し続けたことで新宿文化とともに明石作品が生み出され、現在も影響を与え続ける基盤をつくったといえよう。

5. 結論

明石信道による新宿駅周辺の4つ建築作品について、その設計の依頼過程について分析を行なった。そのなかで明石建築は、新宿文化の礎を築く人物との深い関係が明らかとなった。

6. 謝辞

本研究に際してご協力いただいた相田武文氏、明石乗二氏、阿部幸正氏、安田眞一氏に深く感謝申し上げます。

1 明石信道は1901年函館に生まれ、1928年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業する。在学時から設計を進めていた新宿武蔵野館で建築家としての活動を開始する。

2 1937年。建築史家、評論家。

3 長谷川堯「建築家としての明石信道」『明石信道作品集』、1989年、p.3

4 石樽 督和『闇市の形成と土地所有からみる新宿東口駅前街区の戦後復興過程：新宿駅近傍における都市組織の動態をめぐって』、2015年

5 田辺茂一『わが町、新宿』紀伊國屋書店、2014年、p.43

6 明石信道「人生は一回の青春とは限らない」『建築雑誌(我が建築青春期)』、No.1218、1984年、p.3

7 安与ビル竣工パンフレット

8 明石信道「映画館設計ノート(17)」『映写技術リポート』No.42、1953年、p.5

【図版出展】

図1 根本隆一郎 編集『映画の殿堂新宿武蔵野館』東京：開発社、2011.12

図2 「明石信道作品集」刊行委員会『明石信道作品集』新建築社、1989年

図3 早稲田建築ライブラリー 明石信道

図4 「明石信道作品集」刊行委員会『明石信道作品集』新建築社、1989年

図5 筆者作成

図6 『新人物論』1月号、東方新聞社、1986年

* 株式会社 MAKE AND SEE

** 早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻助手

*** 早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻教授

*MAKE AND SEE Co.Ltd.

**Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.

***Prof, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.